

源 一 郎 郎 郎
語 物 日

221967



日文 701480477

山田孝雄氏蔵
谷崎潤一郎新譯

源氏物語



中央公論社

新譯源氏物語普及版卷四奥附 昭和三十一年九月一日印刷 昭和三十一年

九月五日發行

譯者谷崎潤一郎 校閱者山田孝雄 發行者栗本和夫東京都千代田區丸の内
二の二 印刷者長久保慶一東京都新宿區市谷加賀町一の一二 發行所中央
公論社東京都千代田區丸の内二丁目二番地丸の内ビルディング五九二區

定價二百五十圓



新譯源氏物語卷四目次

若菜上	一
若菜下	一三
柏木	二五
横笛	二九
鈴虫	三七
夕霧	三九

美
童
上

若^{わか} 菜^な 上

イ、弘徽殿太后崩御のこと始めて見ゆ

ロ、先帝の皇女として生れ、先帝の時に、源氏姓を與へられた人と云ふ意。此の先帝は桐壺院の前の代に當る
へ、桐壺院の藤壺の妹に當る

朱雀院の帝は、此の間の行幸^{みゆき}の後、その時分からずとおん心地がすぐれず、お患ひになつていらつしやいます。もと／＼御重病でいらつしやいます上に、今度は殊に物心細くお感じ遊ばすにつけても、かねてから出家の本意がありながら、母后^{ははきさき}の宮の御存生中は何かと御遠慮遊ばして、今日まで見合せていらつしやつたのですが、矢張その方へお心が惹かれるのでせうか、「此の先長くも生きられない心地がする」など、仰せられて、その御用意などを遊ばします。御子^{みこ}たちは、春宮を除き參らせて、女宮たちが四ところおいでになりました。その中で、嘗て先帝の時の源氏^{げんし}で、まだ此の院が春宮の頃にお上りなされたおん方で、藤壺^{ふたば}と呼ばれていらつしやいましたのが、ゆく／＼は後の位にも定まり^{さだまり}給ふべきでしたのに、格別のおん後見^{うしろみ}もおありにならず、母君の身分も、此れと云ふ家柄でもなく、ほんのちよつとした更衣に過ぎませなんだところから、内裏^{うち}でのお附き合ひも肩身が狭く、まして大

后が、尙侍（ないしつかみ）を入内おさせなされて傍（かたはら）に人なきが如く後押しをされたりしましたのに、氣壓（けいあつ）されていらつしやいましたのを、帝もお心のうちではいとほしう思し召しながら、やがて御位をお降りになりましたので、とう／＼芽をお出しにならず、氣の毒な有様で、わが身の不運を恨むやうな風でお亡くなりになりました、そのおん腹の女三宮（おんなのみや）を、大勢おいで遊ばすうちでも、分けて可愛く思ひになつて、大切に冊（かづ）いていらつしやいます。お歳はその時分十三四くらゐでおいでになります。院はいよ／＼世を捨てゝ山籠りをするにつけても、後に取り残されて誰を力にお過しになると云ふのであらうと、たゞ此の御事（おこと）をうしろめたく、思ひ歎いておいでになります。西山の御寺の造營が終りました、そちらへお移りになる御準備をなさいます。傍（かたはら）、また此の宮のおん裳着のことをお思ひ立ちになつて、そのお支度をなさいます。院のうちに御祕藏なすつていらつしやるおん寶物（たからもの）、おん調度どもは更にも云はず、何でもないお手遊びのお道具までも、少し由緒のある限りの品々は、皆此の宮のおん方へとお上げになりました、他の御子達にはその次々の品々を御分配になるのでした。

口、承香殿女御。髭黒
大將の妹

春宮は、さう云ふ御病氣の上に、遁世の思召がおりになるとお聞きになりました、お伺ひになります。母女御もお附き添ひ申して、參上なさいます。すぐれた御寵愛を受けたものではありませぬけれども、斯様に春宮がお生れなされた、限りなくめでたいおん宿世のおん方であいらつしやいますので、院も年頃のおん物語をこま／＼とお取り交しになるのです。宮にもいろ／＼のおん教（おし）、世をお治めに

へ、老いぬればさらぬ
別れのありといへば
いよく見まくほし
き君哉（伊勢物語）

なるお心づかひなどを仰つしやつてお上げになります。お歳の程よりはえらく大人びていらつしやいまして、おん後見の女御方のお里もそれ／＼身分のある方々でいらつしやいますので、たいそうお氣強うお感じになります。「もはや此の世に執着もありませぬ。女宮たちが大勢後に残りますので、その行くすゑを案じますのが、『さらぬ別れ』にも絆になりさうに思はれます。年頃人の身の上で見聞きしたところを考へましても、女は兎角心にもない浅はかなことを仕出來して、人の誹りを受けるやうに生れついてゐますのが、まことに口惜しく悲しいことです。やがて思し召すまゝの御代になつたら、何かにつけて、あの人達に孰れも／＼お眼をかけて上げて下さい。その中で後見などのある人は、その方へ任せて置いても構ひませぬ。三宮は年齒も行きませぬし、私ひとりを頼みにしてゐましたのに、その私が出家をしましたら、後でどのやうに途方に暮れることやらと、それがたまらなく心がゝりで、悲しく思ひます」と、おん眼を押し拭ひつゝお話しなさいます。女御にも、溫い心を持つて盡してお上げになるやうにお頼みになります。が、その女宮のおん母君の、藤壺と云はれたおん方が、誰よりもおん覺えがめでたくて時めいていらつしやつた頃には、皆それと競争をなすつて、睨み合つていらつしたおん間柄のことですから、そのお氣持がまだ残つてゐて、今は格別憎いと云ふ程のことではなくとも、ほんたうに心を籠めてお世話しようと迄は、誰方も思つていらつしやらないのではないでせうか。

朝夕に此の御事を思ひ歎いていらつしやいます。年が暮れて行くにつれて御病氣はまことに重くおなりなされて、御簾の外にもお出になりませぬ。とき／＼御物怪に惱まされ給ふことはありましたけれども、かう云ふ風に引きつゝいて、ちよつとも止む時がなくお苦しみになることはおありにならなかつたのに、矢張今度が最後であるとお思ひになるのです。今は御位をお降りになつていらつしやいます。御在位の頃から御恩にあづかつてをられた人々は、昔に變らず御機嫌うるはしう、お情深ういらつしやるおん有様を、心の慰め所として、いつもお伺ひしては御用を勤めてをられましたので、その方々は皆胸を痛めて、御無事を祈つておいでになります。六條院からも御見舞がたび／＼あります。御自身でもお伺ひなさると仰つしやいますので、その由を聞き召して大そうお喜びになります。中納言の君が參上なさいましたのを御簾の内にお召しになりました、こまやかなおん物語があります。「故院がお崩れなさいます時にさま／＼な御遺言があつた中で、此の院のおんことゝ今のお上のおんことを、取り分けてお云ひのこしになりましたけれども、位にある時は公おぎやけの掟があるので、心のうちの親しみは變らないながら、つまらない行き違ひから、お恨みを受けるやうなこともあつたと思ひますが、長い年月の間に、その時分のことを後まで恨んでをられるやうな様子を、どう云ふ折にもお洩らしになつたことはありません。賢い人でも自分の身の上のことになると、道理を間違へて取り亂したりして、必ず意趣を含み、曲つた行ひをするやうになることが、昔でさへも多かつたのです。

ですから、いつかはそんなお心がちらりと覗けることもあらうと、世間の人もさう思つて疑つてゐましたのに、とう／＼我慢し通してしまはれて、春宮などにも好意を寄せて下さいます。その上姫を入内させて、今は一層深い間柄になり、親しくなすつて下さいますのを、心の内では限りもなく嬉しく思ひながら、何分本性の愚かなのに加へて、子故の闇に迷つたりして、見苦しい振舞をするのも如何と、わざと餘所事のやうに、人任せひとまかにしてゐます。尤もお上のおんことは、御遺言を違へず世をお譲り申し上げたところ、斯様に末の世の明君として天が下を治め給ひ、前の代さきの不面目を取り返して下さいましたのは、全く私の願ひ通りになつた譯で、此の上の喜びはありませぬ。それにつけても、此の間の秋の行幸から、昔の事も偲おもはれてなつかしく、お目にかゝりたく思ふのです。直々じきに對面して申し上げたいことなどもあります。是非訪ねて來て下さるやうにお勧め申して下さい」など、涙ぐみつゝ仰つしやいます。中納言の君、「遠い昔のいきさつは、何とも私には分りかねることでございませう。成人致しまして、公にも仕へるやうになりましたから、世の中の事に彼れ此れと係り合ひますにつけてまして、大小となく父に相談致しますけれども、さう云ふ場合にも、又内輪の話の折などにも、若い時分に辛いことがあつたなど、つひぞ仄はなかされたことはございませぬ。『かうして朝廷の御後見みを中途で御辭退申し上げ、遁世の望みを叶へるためにすつかり引き籠つてしまつてからは、何事も與あづかり知らぬやうにしてゐるので、故院の御遺言のやうにもお仕へせずにゐるのです。今の院が御在

位のうちは、自分も年が若かつたし、人間も出来てゐなかつたし、偉い人たちが上に大勢控へてもられたので、自分の志を遂げて御覽に入れる機會がなかつたのでした。今はかうして御位をお降りになつて、長閑^{のどか}にお暮し遊ばしていらつしやるので、お伺ひして心のうちを隔てなく聞え上げもし、承らしても戴きたいと思ふのですが、やはり何となく窮屈な身分になつたので、ついそのまゝに月日を過してゐるやうな譯で』と、折々歎いておいでになります」など、お奏しになります。

まだ二十にも少し足りない程ですけれども、たいそう貴祿も整つて、顔だちにも今が盛りの色つやが溢れて、ひどく美しいのを、おん眼にとめて打ち守らせ給ひながら、處置に惱んでいらつしやる此の姫君を、かう云ふ者になど、人知れずお思ひ寄りになるのです。『何か近頃は、太政大臣^{かみきみ}のあたりに縁があつて、身を固めたと云ふ話だね。年頃故障が這入つてゐるやうに聞いてゐたので、氣の毒なことに思つてゐたのが、それで安心したとは云ふものゝ、多少残念に思ふ仔細もある』と仰せられますので、何と思し召して仰つしやることやらと、訝^{いぶか}しく感じながら、成る程、さう云へば、あの姫宮のお扱ひにお困りなされて、然るべき相手があつたら、それに嫁^{よめ}がせて心安く出家をしたいものとお考へになつていらつしやるのを自然洩れ聞いてゐましたので、ひよつとしたらそんなおつもりではないのかと、考へつきはしますものゝ、でもそんなことを、何として心得顔に御返事申し上げませう。たゞ、「何の働きもございませぬ身には、なか／＼恰好な縁も見つかりかねまして」とばかり申

し上げて、差控へてしまひます。女房などは御簾の蔭から身を乗り出して、お姿を見て、「御器量と云ひ、身嗜みと云ひ、あれだけの方がめつたにおありになりませうか。何と云ふ御立派な」など、寄り集つて云ふのですが、中で年を取つたのは、「いや／＼、さう云つても、あの六條院がこれほどの若さでおいでになつた時のおん有様と、比べものになりませうか。ほんにあなたのお方は眼も眩むやうにお綺麗でいらつしやつたものを」など、云ひ合ひますのを、院もお聞き遊ばして、「全くあなたは異様に美しい人だつたね。近頃は又あの時分よりも老熟して、光るとはあのやうなのを云ふのかと思へる程、いよ／＼輝きが増して來た。眞面目に公の用事などをする時は、凜とした威嚴があつて、見るも眩い心地がするし、又打ち解けて冗談を云つたりふざけたりする遊びの場合には、その方面でも竝ならず愛嬌があつて、誰よりも親しみ易く、惹きつけられる氣がするし、こんなのは世間に例がない。何事にも前の世の善根が思ひやられて、珍しい様子をした人だ。幼い時分内裏で育てられてゐた頃は、どんなに限りなく帝王の慈愛をお受けになつたことか。お上があんなにも撫でさするやうに大切に遊ばして、御自分の身にかへてもと思し召していらつしやつたが、我が儘な心驕りをせず、遜つて、二十になる迄は納言にもならないでしまつた。たしか二十一の歳に、宰相で大將を兼ねられたのではなかつたであらうか。それから思ふと此の中納言がえらい出世をしてゐるのは、だん／＼と一門の聲望が盛んになつたせゐであらう。政治の方の學問とか心構へとか云ふ點からは、これもをさを

さ父に劣りさうでもなく、どうかすると親以上に老成した感じがあるのは奇特なことだね」など、お褒めになります。

姫宮がたいそう美しくて、あどけなく無邪氣なおん有様なのを見給ふにつけても、「此の宮をせい／＼可愛がつて上げて、未熟なところを大目に見て教へて差上げるやうな人で、信用出来る人があつたら預けたいものだ」など、仰せになります。重だつたおん乳母どもをお召し出しになつて、おん裳着の時のことなどを仰せられるついでに、「六條の大臣が式部卿宮の姫を生し立てたやうに、此の宮を引き取つて育てゝくれる人はないものであらうか。尋常人の中にはありさうもないし、内裏には中宮が祇候しておいでになる。つぎ／＼の女御達とても、やんごとない人々ばかりが揃つてをられるのであるから、しつかりした後見がなくては、さう云ふ中に交つて宮仕をするのも、大抵ではないであらう。此の權中納言の朝臣が獨身であつた間に、仄かしてみればよかつたのだ。若いけれども非常にすぐれたところがあつて、行末たのもしさうな人らしいのに」と仰せになります。「でも中納言はもと／＼至つて實直な人で、年ごろ今のおん方に思ひを寄せてゐまして、餘所のあたりを見向きもしなかつたのでございますから、その望みが叶つた今となつては、尙更心を動かす筈はございますまい。それよりはあの父の院こそ、中々今でも、いろ／＼な折につけて人を慕はしくお思ひになる心が、絶えずおありになるやうでございます。分けてもやんごとない御身分のお方をお求めになるお志が深くて、前齋

院のおんことなどをも未だに忘れることが出来ず、おん文をお上げになりますさうで」と申し上げます。「いや、その相變らずの浮氣心が、どうも心配なのだ」とは仰せになりますものゝ、ほんに、數多の人達の中に這入つて、辛い思ひをすることはあつても、矢張親代りと云ふことにして、そつくり彼處へ引き取つて貰つたら、などゝもお思ひになるであらませう。「ほんたうに、まあ少しでも世間並な暮しをさせたいと云ふやうな娘を持つたら、同じことならあの人の側に置いてやりたく思ふであらうね。どうせ長くはない浮世に生きてゐる間は、あゝ云ふ風に心ゆく限りの樂しみをしてこそ過したい。私が女だつたら、同じ兄弟であつても、必ず寄り添つて契つたであらう。若い時分などには、よくさう思つたものだ。まして女が迷はされるのは尤もな譯だ」と仰つしやるのでしたが、お胸の中では、昔の尙侍かみの君のおんことなどを思ひ出しておいでになるのでせう。

此の姫君のおん後見うしろみたちの中で、或る地位の高いおん乳母の兄に左中辨がゐましたが、その人は六條院にも出入りしてゐまして、年ごろ親しく仕へてゐるのでした。此方の御殿にも深く心を寄せてゐまして、よくお伺ひしますので、或る日乳母はその兄が參上したのに會ひまして、物語をしますついでに、「お上がこれ／＼の思召があつて、それらしいことを仰つしやつていらつしやいますが、折があつたらあの院にお洩らしになつて下さい。女御子おんなごと云ふものは、獨身ひとりみでおいでなさいますが普通のすけれども、何かにつけて面倒を見てお上げ申し、いろ／＼の場合にお世話をして上げる人があつた

ら心丈夫だと思ひます。此のおん方には、お上をお措き参らせて、親身になつてお上げ申す人がないので、私どもがお仕へ申してゐると云つても、何ばかりのお役にも立ちませぬ。お側にゐるのは私だけではないのですから、自然思ひも寄らないことを引き起したりして、お宜しくない評判などが立ちましたら、どんなに厄介なこととせう。お上の御在生中に、何とか此のおん方のおん身が定まりましたら、御奉公し易からうと思ひます。貴いおん血筋でいらつしやつても、女はいとも宿世の定め難いものなのですから、考へるといへ／＼心配になりますし、斯様に大勢の御子たちがおいで遊ばす中でも、取り分けいとしがられていらつしやいますので、人の嫉みがあるかも知れませぬし、何とかして些細な瑾をもおつけ申さないやうにしたいのですが」と、相談を持ちかけますと、「どういふ次第が
おありになるのか、不思議にあの院はお氣の永いお方で、かりにもお見初めになつた人は、お心の留まつたのも、又それほど深くなかつたのも、ほど／＼につけてお迎へ取りになつて、御殿のうちに數多お住ませになつていらつしやるが、大切にすつておいでなのは、矢張りやんときまつてゐて、お一方だけなのだから、そのお方の勢の強い蔭には、あるにかひない月日を送つていらつしやる方々が、大勢あると云ふ譯です。ところで、御縁があつて、もしさう云ふ風なことにでもなるとしたら、その大切なお一方とても、こちらと肩を並べてお威張りになることは出来ないであらう、と、一往は想像されるけれども、なほその點はどうであらうかと、案ぜられるふしもあるやうな氣がする。さうかと

云つて、『此の年になつて、身に餘る榮耀榮華えいうえいけわをして、何一つ心残りなことはないのだけれども、ただ女のことについては、今迄に人の非難も受けたし、自分の心にもまだ不満足なことがある』と、いつも内輪の御冗談話に仰つしやつておいでになるが、全く私どもから見てもさうでいらつしやると思はれる。いろ／＼な關係でお世話をしていらつしやる方々は、誰方も不似合ひな、身分の低い人達ではいらつしやらないけれども、皆たかの知れた尋常人たゞびとのことなので、院のおん有様に比べられるやうな聲望を持つたお方は、いらつしやらないやうに思へる。それを思ふと、同じことならさう云ふ御縁がお出来になつたら、どんなに似つかはしい御夫婦におなりなさらう」と、辨はそんな風に云ひますので、乳母はまた何かの折に、「これ／＼のことを某なにかしの朝臣はのめに仄はかしましたところ、『必ずかの院は御承諾されるであらう。年頃の御希望が叶ふ譯なのだから、たしかに此方のお許しがあるものなら、お取次をしよう』と申してをりますが、どう致したものでございませう。あの院はそれ／＼に方々かた／＼の身分々々をお考へなされて、珍しいほど行き届いた御仕向けをなさるのですが、尋常人たゞびとでさへ、外に自分と同じやうに可愛がられてゐる人が立ち並んでゐられては面白くなく思ふのですから、まして宮は、お心に餘ることもありますでせう。宮のお世話をさせて戴きたいと仰つしやる方々は、外にも數多いらつしやいます。よく／＼御分別なさいまして、お取りきめなさいますのがようございます。高貴な方と申しましても當節の風としましては皆てきばきと御自分で處置をして、お好きなやうに世の